



Title	認知・情動発達に及ぼす母子関係の影響
Author(s)	田島, 信元
Citation	北海道大學教育學部紀要, 55, 125-132
Issue Date	1991-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29357
Type	departmental bulletin paper
File Information	55_P125-132.pdf



認知・情動発達に及ぼす母子関係の影響

田 島 信 元

Effects of Mother-Infant Relationship on Cognitive-Emotional Development

Nobumoto TAJIMA

問 題

最近の認知発達心理学の重要な知見のひとつに、新生児・乳児さえも含む子どもの能力の優秀さについての再評価がある。例えば、乳児における、以前には考えられなかったような知覚・記憶・概念化の能力の存在（コーエン，1979／1981）や、2－3歳の幼児でも、以前はピアジェが児童期にならないと獲得できないとされた具体的操作の能力を示し得ること（ゲルマン，1979／1981）などが明らかにされている。その一方で、青年期・成人期に至って当然獲得されると考えられていた形式的操作能力が、必ずしも全員、あるいは全領域ではそうした状況がみられないといった諸報告（ex. Capon & Kuhn, 1979）などを考え合わせると、少なくともピアジェが想定した認知能力の質的发展（段階的発達）の存在は認められなくなるし、極論すると、基本的な認知・思考あるいは情報処理能力は発達しないのではないかということが示唆されるのである。

しかし、こうした乳幼児の有能さにもかかわらず、実際の課題解決場面では、特別な配慮がとられない限り、年少の子どもは相変わらず課題には失敗し、年長児（者）はそうした配慮がなくても成功する率が高いのである（ゲルマン，同上）。つまり、年少児は、かりに年長児や大人と変わらぬ有能さ（基本的情報処理能力）をもっているとしても、その有能さを十分に発揮することが出来ないのである。

すると、発達というのは、そうした有能さを発揮する条件の獲得過程と捉えることができよう。そして、この発揮条件こそ、近年議論されている“何が発達するのか”ということの中身であり、子どもと大人の違いを示すものであろう。具体的には、記憶容量の効率的な使用法（ex. Case, 1978）や、ストラテジー、ルールといった認知活動そのものを効率的に行うための知識・技能・態度の獲得（ex. Siegler, 1986）、あるいは、自己と他者の関係の理解といった、認知活動を行う場面（文化的文脈・環境）についての知識など、様々なものがあると思われる。要するに、発達するものが以上のような基本的情報処理能力に基づく知識・技能・態度などであるとすると、年長者は年少の子よりそれらを早くから獲得し始めており、かつ、獲得し続けているという意味では、優れているといえよう。

しかし同時に、ここで大事なことは、それらの知識は具体的な認知活動の所産であるため、発達には課題特殊的、領域固有的な側面をもつことが想定されており（コール＆スクリブナー，1974／1982）、そのため、単純に年長者と年少者を比較できない発達の個人差が存在する、といった認識が必要になってくることであろう。しかしこの点については、ケース・スタディによる実証データがいくつかある程度で、必ずしも十分な検証データがあるわけではないことも事実である（Cole & Cole, 1989）。そこで本研究では、特に、発達の領域固有的側面に焦点をあて、[現実]に認知活動が行われる場である社会的相互交渉のどのような経験が、どのような側面の発達に影響

を及ぼすのか」という点について、縦断的な資料に基づき吟味してみる。

具体的には、社会的相互交渉の経験を表すものとして、親の育児態度・行動と実際の母子相互交渉のあり方の指標をとり、一方、子どもの発達に諸側面、とりわけ認知的側面と社会・情動的側面を表すものとして、それぞれ対物行動、対人行動をとり、さらに両側面を含むものとしての言語発達の指標をとって、両指標間の相関関係を吟味することにより上記の問題に一次的なアプローチを試みる。

方 法

1. 対 象

東京都区内の総合病院産科外来を受診し、妊娠初期からの縦断的なアンケート調査（5回）および出産後3か月時から2歳時に至る迄の家庭訪問調査（5回）に応諾した母親とその第1子のペア、35ケースである。

なお、本研究では、子どもの発達指標の個人差が明確に測定されやすいという理由から、生後8か月以降の時期を選択、分析が終了している18か月までの資料について報告する。

2. 調 査 内 容

① 親の育児態度：母親の育児行動を支える態度要因として、母親の子どもイメージ（8か月時）、母親の育児感想（12か月時）について質問紙調査を行った。また、より基礎的な要因として母親自身の気質を測定するため、Careyらの幼児用の行動様式質問紙の各気質次元に対応する諸項目の中から成人にも使用できる項目を選択し、質問紙を構成した。さらに、父親と母親の間での育児に対する考え方の一致・不一致について、母親への質問紙（12か月時）により調査した。

② 親の育児行動：8か月時に、家庭での自由な母子相互交渉場面が50—70分間VTRにより観察され、そのうちの45分間について30秒毎のタイムサンプリングに基づくチェックリスト法による分析が、複数の観察者によって行われた（一致率 .85以上）。チェックリストは母親、子どもそれぞれ15、10項目で、お互いの働きかけの質（刺激・反応関係）が明らかになるものによって構成されたが、本報告では母親の刺激作用としての注意喚起行動に絞って分析された。その他、8か月時の父子関係について、特に父子の具体的な交流のあり方を、母親に対する質問紙を通して調査した。

③子どもの発達指標：社会・情動的発達の指標として「対人行動」（親への働きかけ、情動表出・理解、他児との交流）、認知発達の指標として「対物行動」（玩具・絵本等での遊び方、模倣、描画（線）、家事・食器等の道具使用）、さらに、社会・情動的発達と認知発達の両側面を統合した指標として「言語発達（指さし行動、言語理解、発話行動）」を、乳幼児精神発達診断法（津守・稲毛、1977）の諸項目を参考に構成した質問紙により調査した。

結 果 と 考 察

1. 親の養育態度の影響

① 母の子どもイメージ（8か月）と子どもの発達指標（12か月）との関係

8か月時にSD法（形容詞対20項目）で測定した母親の持つ子どものイメージと、12か月時の子どもの発達指標との相関関係をみてみると（Table 1参照）、「恐い」というイメージが、対物行動に比べて対人行動に多くの相関を示しているのに対し、「意欲的」というイメージは、逆に、

Table 1 母の子ども像（8か月）と社会性・認知発達（12か月）との関係

		恐 れ	意 欲 的			恐 れ	意 欲 的
対 人 行 動	大人と球遊び	-.03	.42*	対 物 行 動	瓶で飲める	-.45*	-.02
	社交遊び好む	-.39*	.04		戸を開けられる	-.24	.52**
	不快感表出	-.41*	-.21		障害物回避可能	-.04	.63***
	嫉妬感表出	-.39*	.38*		絵本飽きず読む	-.07	.36*
	快感情理解可能	-.47**	.11		鉛筆メチャ書き	-.02	.55***
	表情理解可能	-.41*	.21		匙独自使用好む	-.15	.40*
認 知	能度相手に依存	-.36*	-.02	動	道具使用模倣	.08	.44*
					物体落下好む	-.39*	-.04
					水いたずら好む	-.41*	.11
					紐で物を引く	.07	.45**
					砂の出し入れ	-.35*	.38*
					潜り遊び	-.14	.41*

* p < .05

** p < .01

*** p < .001

対人行動よりは対物行動に多くの相関を示していることがわかる。

母親の子ども像は、かなり直接的に実際の子への関わりに影響することが予想され、否定的な子ども像が不十分なかかわりを招き、結果として子どもの発達にネガティブな影響を及ぼすことは十分考えられるが、その影響が対人行動といった社会・情動的側面に強く現れることが示唆されているのである。このことは、意欲的という肯定的な子ども像が、対物行動といった認知的側面により強く好ましい影響を与えるというもう一方の示唆も考え合わせると、母親の影響の領域固有性が強く示唆されているといえよう。

Table 2 母の育児感想（12か月）と社会性・認知発達（18か月）との関係

		肯 定 的 育 児 感 想					否 定 的 育 児 感 想			
		楽しい	充実感	新 鮮	自 信	母成長	疲 れ	神経質	邪 魔	焦 り
他 児 と の 交 流	積極的	.39*	.50**	.49**	.10	.30	-.20	-.20	-.34	-.34
	親しみ	.47**	.50**	.57**	.50**	.43*	-.37*	-.31	-.40*	-.39*
	並列遊び	.37*	.28	.23	.16	.08	-.28	-.43*	-.24	-.30
	働きかけ	.11	.12	.45*	.18	.29	.13	.14	-.14	-.03
	喧嘩（しない）	.36*	.37*	.24	.03	.28	-.22	.09	-.15	-.20
対 物 行 動	模倣	.03	.00	.24	.46**	.34	-.02	.13	-.09	-.03
	積木重ね	-.12	.12	.08	.06	.30	.17	.18	-.25	.07
	紐で引く	.16	.24	.15	.22	.50**	.10	-.27	-.22	-.17
	砂の出し入れ	.10	.05	.18	.22	.15	-.18	-.39*	-.11	-.21
	潜り遊び	-.24	-.27	-.03	-.01	.07	.22	-.06	-.14	.06
	見立て遊び	.28	.25	.20	.03	.17	-.02	-.42*	-.37*	-.39*
	家事の模倣	-.00	.01	-.06	.15	.13	-.01	-.25	-.29	-.28
	鉛筆曲線書き	-.00	.09	.22	.25	.33	-.04	-.05	-.21	-.19
	紙で包む	.35*	.12	.26	.40*	.08	-.29	-.42*	-.21	-.24
	電話遊び	-.02	-.20	-.01	-.10	-.10	.16	-.04	-.14	.07
	人形遊び	.06	.10	.13	.06	-.05	.06	-.21	-.12	-.02

* p < .05, ** p < .01

② 母の育児感想(12か月)と子どもの発達指標(18か月)との関係

母親の12か月時点の育児感想(全18項目)中、18か月時の子どもの対人行動・対物行動との間に相関関係がみられた項目が Table 2 に示されている。肯定的育児感想では、対人行動(他児との交流)との間に多くの相関関係がみられるのに対し、対物行動ではそれがほとんどみられないという対照的な結果となっている。否定的育児感想では「神経質(育児ノイローゼになりそう)」が対人行動に比べ対物行動に比較的多くの相関関係を示しているものの、肯定的育児感想に比べると、総じて目立った関係はみられていないといえよう。

このように、母親の育児感想は、全体としては、対物行動というより対人行動に強く影響することが示唆されるが、「神経質」のような存在を考え合わせると、ここでも特定の感想に基づく母親の働きかけは、特定の領域に影響を及ぼすといった領域固有的側面がみられているといえよう。

③ 母親の気質と子どもの発達指標(12か月)との関係

母親の気質は、子どもに対するかかわり方に一定の影響を及ぼすものと考えられるが、調査した全9次元のうち「活動性」と「反応の強さ」において、発達指標との間に、両次元の異質的な機能を示唆するように顕著な関係がみられた(Table 3 参照)。「反応の強さ」の次元は、子どもの気質においても変動性の少ない基礎的な次元であり(上村・田島, 1988), 母親の働きかけ方の明確さにかかわるものと考えられる。それだけに社会・情動的側面(表情表出)と認知的側面(対物行動)の両方に関連を示しているが、それでも両側面を含むと考えられる言語発達には関連が薄い。一方、「活動性」は母親の働きかけの性質、とりわけ子どもを活発に周りの環境に導くような働きかけに寄与すると考えられるが、こちらは、逆に、言語発達にのみ関連を持っている。

Table 3 母の気質と発達指標
(12か月)との関係

		活動性	反応の強さ
表情表出	興奮表出	.34	.57***
	恐れ表出	-.12	.60***
	嫉妬表出	-.22	.38*
	表情豊か	.01	.46**
対物行動	絵本飽きず読む	-.04	.40*
	物の出し入れ	-.06	.40*
	積木はめ込み	.13	.46**
	鉛筆メチャ書き	-.10	.39*
	道具使用模倣	-.22	.37*
言語発達	変化に驚き指さす	-.47**	.46**
	目的物に指さす	-.48**	.23
	達成迄さし続ける	-.48**	.07
	声を伴って指さす	-.45*	.01
	伝えるよう指さす	-.50**	.18
	顔を向け応答する	-.37*	.17

* $p < .05$, ** $p < .01$

このような結果は、母親の直接的な働きかけの資料を媒介させていないため、必ずしも影響の因果関係は明確ではないが、少なくとも、領域固有的な側面があることと同時に、「反応の強さ」に示されるように、比較的広い領域に影響を持つものがあることも示唆されている。

④ 父母の育児観のズレ（12か月）と子どもの発達指標（18か月）との関係

親の育児観が子どもへの働きかけのあり方に大きな影響を及ぼすことは自明ともいえるが、それだけに両親の間で育児観にズレがあると、親の子への働きかけの質は好ましくないものになることが予測され、したがって子供の発達にはよい影響を与えないと考えられる。Table 4 は12か月時の父母の育児観のズレと18か月時の発達指標との相関関係の有無を示しているが、社会・情動的側面（他児との交流）の一部においてのみ予測したような負の関連がみられる他は、対物行動でも言語発達においても関連はみられていない。育児観の相違は主として親の子への関わりの積極さなどの質に影響を及ぼすと考えられるので、子どもにとっても対人的な関わりに影響を受けることはわかるが、こうした点にのみ限られているとすれば、少なくともここでも領域固有的性質が存在するということだけは示唆されていよう。

Table 4 父母の育児観のズレ（12か月）と発達指標（18か月）との関係

父母間のズレ			父母間のズレ			父母間のズレ		
他児との交流	積極的	-.48**	対物行動	積木重ね	.02	言語発達	本読みせがむ	-.14
	親しみ	-.09		紐で引く	-.21		独話をいう	.23
	並列遊び	.15		砂の出し入れ	.26		バイバイ	.14
	働きかけ	-.20		潜り遊び	.20		パパ・ママ	.01
	貸せる	-.39*		見立て遊び	.08		言葉で要求	.23
	喧嘩（しない）	-.16		家事の模倣	-.09		言葉の模倣	.33
	模倣	.06		鉛筆曲線書き	-.09		指さし	.08
				紙で包む	.22			
				電話遊び	-.05			
				人形遊び	.21			

* $p < .05$

** $p < .01$

2. 親の養育行動の影響

① 母親の注意喚起行動（8か月）と子どもの発達指標（12か月）との関係

母親の子どもへの直接的な働きかけ行動は、これまでみてきた養育態度の諸変数に比べて、子どもの発達に直接的な関連を持つことが予測されるが、ここではその中で8か月時の母親の子どもに対する刺激作用の影響のあり方についてみる。

生後8か月という時期は、それまでの時期に多くみられた、母親と子どもが直接対面して刺激を母親自身が出すといった行動より、子どもが興味を持つ対象物を媒介に母と子が相互交渉を行うといった、いわゆる「三項関係」に基づく行動が主流になっている時期である。その意味で、ここでは母親自身に子どもの注意を向けさせる「対母・注意喚起」行動と、対象物に注意を向けさせる「対物・注意喚起」行動という二つの働きかけ行動の子どもの発達指標に対する関連のあり方をみる。

結果はTable 5, 6に示されているように、「対母」が12か月の発達指標に負の関連を示しているのに対し、「対物」の方はほとんどが正の関連を示している。しかもここで注目しなければならないのは、「対母」が社会・情動的行動（対人行動）と言語発達に関連が多いのに対し、「対

Table 5 母の対母・注意喚起行動（8か月）と発達指標（12か月）との関係

	母自身に注目させる			母自身に注目させる	
対 人 行 動	手本を模倣	-.36*	言 語 発 達	+話者を見つめる	-.38*
	水飲み自立出張	-.46**		アチチといって触らぬ	-.38*
	顔色見ていたずら	-.46**		+熟知場所を知らせる	.35*
	わざと拒否・反抗	-.38		声を出して注意を引く	-.48**
	+恐れ表出	.36*		直接指をつけて指さす	-.41*
対 物 行 動	戸の開け閉め	-.35*		機嫌時のみ指さす	-.35*
	+物体落下好む	-.38*		目標達成迄さし続ける	-.35*
				目標達成迄声も伴わす	-.40*

* $p < .05$, ** $p < .01$ 項目前無印：物理的働きかけ +印：言語的働きかけ

Table 6 母の対物・注意喚起行動（8か月）と発達指標（12か月）との関係

	物自体に注目させる			物自体に注目させる	
対 人 行 動	怒り表出	-.36*	言 語	# 頂戴に手渡す	.52***
				■手出しのみで手渡す	.38*
				+ パパ何処？に顔向け	.46**
				+ ママ何処？に顔向け	.42*
対 物 行 動	+ スイッチ鍵遊び	.37*	発 達	# 簡単な依頼に応答	.40*
	+ 障害物回避可能	.37*		大人の言葉模倣	-.39*
	絵本飽きず読む	.37*		# 機嫌時のみ指さし	.39*
	+ 絵本飽きず読む	.48**		■ 目的達成迄指さし続く	.39*
	+ 匙独自使用好む	.38*		# 伝えるように指さし	.38*
	+ 砂の出し入れ	.52**		# 何処？に指さし応答	.36*
			■ 耳どれ？に非言語応答	-.36*	

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

+印：言語的働きかけ

■印：物理・ポインティング

項目前無印：物理的働きかけ

#印：言語・モデリング

物」の方は認知的側面（対物行動）と言語発達に関連しているということである。まさに、「対母」という対人的働きかけが対人行動に、そして、「対物」という対物的働きかけが対物行動に限定的に影響しているということで、養育行動においても領域固有的な影響性がみられているのである。ところで、言語発達に対しては両方のはたらきかけとも関連をみせており、当初予測したように言語発達は社会・情動的、認知的側面の両側面を含むものと考えられるが、項目のほとんどは共通しておらず、やはりそれぞれの働きかけに即した影響性の存在を考えるほうが妥当であろうと思われる。

② 父子関係（8か月）と子どもの発達指標（12か月）との関係

母親に比べて、父親の子への働きかけ行動の発達への影響性はどのような状況を示すであろうか。Table 7に、8か月時の父子遊びの種類の多さに関する母親からの質問紙データと、12か月時の発達指標との相関が示されているが、社会・情動的側面（対人行動）、認知的側面（対物行動）、言語発達のいずれの側面においても正の関連を示していることがわかる。これまでみてきた母親の態度・行動の多くのものが領域固有的性質を示唆していたのとは対照的に、「父子遊び」では

全体的な影響性が示唆されており興味深い。もちろん、父親のかかわりが、その影響性において分化がみられないほど細部にかかわっていない（あるいは、指標そのものの性質による）といった点があるかもしれないが、少なくとも父親と母親では子どもの発達に対する影響性が異なるという意味では、親の働きかけの領域固有的な性質は認めざるを得ないと思われる。

Table 7 父子関係（8か月）と発達指標（12か月）との関係

父 子 遊 び			父 子 遊 び		
対 人 行 動	社交遊び自らやる	.38*	言 語	パパは何处？に顔向け	.37*
	得意表情	.47**		言葉の指示で物発見	.48**
	愛情表現	.40*		簡単な依頼に応答	.43*
	表情の豊かさ	.37*		バイバイ等の動作をする	.41*
	歓喜表現理解	.35*		熟知場所を知らせる	.38*
対 物 行 動	物の出し入れ	.40*	発 達	物から指を離して指さす	.53**
	匙独自使用好む	.43*		変化に驚き指さす	.53**
	道具使用模倣	.40*		目的物に指さす	.46**
	紐で物を引く	.46**		達成迄さし続ける	.44*
	砂の出し入れ	.51**		声を伴って指さす	.38*
	潜り遊び	.44*		伝えるよう指さす	.44*

* $p < .05$, ** $p < .01$

結 論

本研究は、親の養育態度・行動は、子どもの発達に全体的に影響を与えるというよりは、それぞれの態度・行動に対応した側面にのみ影響を与えるといった領域固有的性質を持つのではないかと、という予測のもとに、養育態度・行動要因と発達指標との間にみられる関連のあり方が吟味された。

結果は、母親の養育態度・行動の多くが子どもの発達指標の社会・情動的、認知的側面に分化的に関連しており、基本的には予測は支持される方向にあった。とりわけ、観察に基づく実際の母親の働きかけ行動においては、対人的働きかけは対人行動の発達に、対物的働きかけは対物行動の発達にそれぞれ関連しており、明かな領域固有性を示した。また、発達の両側面を含むものと想定された言語発達においても、そうした状況は示しながらも、細部を見るとやはり領域固有性を示していた。もちろん、社会・情動的、認知的発達の各側面においても、それぞれの内部では分化がみられており、親の働きかけの子どもの発達に対する領域固有的影響性は認めざるを得ないのではないと思われる。ただ、母親の気質の中で「反応の強さ」と、父親のかかわりの指標（父子遊び）は、資料的には全体に関連していたが、この結果はより基礎的性質、あるいはより間接的なかかわりを示す指標に限られていると考えた方がよいと思われる。

以上のような、環境のあり方に基づく「発達の領域固有性」を支持する結果は、最近の新しい発達観を支持することにつながっていく。

最近の発達観、とりわけ近年の新生児・乳児研究と文化的文脈理論に基づく発達観では、ヒトは発達の出発点から、優れた情報処理・学習の能力をもち、発達の過程でそれをフルに発揮して

知識を集積し、構造化していくこと、そして、それは主体の活動が行われる場、即ち、社会・文化的文脈における刺激や応答のあり方によって促進され、また、方向づけられるということを強く主張する。その意味では、“発達する”のは情報処理能力そのものというよりは、その能力を発揮した結果の所産である知識や技能、あるいは能力の発揮の仕方などにかかわる態度（構え）的知識であり、子どもと大人の違いはそこにあるということになる。このような発達観は、従来ピアジェらが考えていた、“基本的には発達は社会・文化の違いを超えて共通である”という「発達の普遍性（単線型発達観）」に対し、“発達は社会的・文化的文脈（環境）条件にかかわる領域においてみられる”という「発達の文脈依存・領域固有性（コール・スクリプナー、1974/1984）」の考え方につながり、その意味では、発達の道筋は単線的なものではなく、異なるコースと異なる到達点をもつ複数の道筋があるという「発達の相対性（複線型発達観）」が想定されてくるといえる。

今後は、以上のような点の資料的吟味が、発達心理学の課題のひとつとして、期待されるところである。

引用文献

- Capon, N., & Kuhn, D. 1979 Logical reasoning in the supermarket: Adult females' use of proportional reasoning strategy in an everyday context. *Developmental Psychology*, 15, 450-452.
- Case, R. 1978 Intellectual development from birth to adulthood: A neo-Piagetian interpretation, In R. S. Siegler (ed.) *Children's thinking: What develops?* Hillsdale, N. J.: LEA.
- コーエン, L. B. (高橋道子訳) 1979/1981 乳児の知覚と認知に関する最近の知識 波多野誼余夫監訳 児童心理学 3 子どもの知的発達 金子書房
- コール, M.・スクリプナー, S. (若井邦夫訳) 1974/1982 文化と思考—認知心理学的考察 サイエンス社
- Cole, M., & Cole, S. R. 1989 *The development of children*. New York: Freeman.
- ゲルマン, R. (子安増夫訳) 1979/1981 就学前児の思考 波多野誼余夫監訳 児童心理学 3: 子どもの知的発達 金子書房
- Siegler, R. S. 1986 *Children's thinking*. Endlewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall.
- 津守 真・稲毛敦子 1977 乳幼児精神発達診断法 大日本図書
- 上村佳世子・田島信元 1988 発達初期の母子関係と子どもの発達<その2>子どもの気質と母子関係の発達との関係 日本教育心理学会第30回大会発表論文集, 180-181.